

聖書：マタイ 6：12、14～15

説教題：罪の赦し

日時：2018年8月5日（朝拝）

今日は「主の祈り」の5つ目の祈りを見て行きます。おそらくこの祈りは主の祈りの中でも最も大きなインパクトを持って私たちに迫って来る祈りではないでしょうか。その理由の一つは、この5番目の祈りにだけ、「私たちもまた～します」という私たちのすべきことがついていることです。ただ、これこれこうして下さいとか、こうなりますようにと祈ることは簡単であり、また気楽です。しかしここには「私たちもまた～します」という言葉があります。お願いはしたいが自分が何かをすることは約束したくないし、その義務を負わされたくない。そういう私たちのずるい性質が問われるわけです。そしてもう一つ、この祈りが私たちの心に切り込んで来る理由は、これが「人を赦す」というテーマに関わっているからです。人間関係の多くの問題は、この「誰かを赦せない」ということと関係しているものです。私たちは自分が他の人に言ったことやしたことは都合良く忘れませんが、他の人が私に言ったことやしたことはしっかり覚えています。そしてあの人は私にこんなひどいことを言って私を傷つけた！私のメンツをつぶした！私の人生をメチャクチャにしてくれた！と思っている。その人たちのことがこの祈りをする時に思い浮かんで来る。そしてその人たちを私は赦します！とここで言わなければならない。それはいやだ！それはちょっと待ってもらいたい！そこまではまだ約束したくない！そのように抵抗したくなるのです。しかしこの祈りは私がおその人を赦さなければ神もまた私を赦してくださらないと言っています。自分の罪は赦して頂きたいが、そのためにはあの人を赦すこととセットでなければならない。どちらかだけ取ることはできない。そういう板ばさみにあって、この祈りは私たちにグサッと来るということになるのでしょうか。

これと関連してある人たちはここの訳を問題にします。主の祈りのこの部分はちょっとおかしくないか。訳した人が訳し方を間違えたのではないか。そのように問う声があれば上がります。特に私たちが毎週礼拝で祈っている文語訳ではこうなっています。「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。」これだと私たちが他の人を赦すことが先で、その私たちの行いに基づいて神の赦しが与えられるというニュアンスに読めると。実はこの部分は新改訳 2017 で訳が変わったところです。これまでの第3版ではこうなっていました。「私たちの負い目をお赦してください。私たち

も、私たちに負い目のある人たちを赦しました。」 特に最後の部分、第3版では「赦しました」と過去形で訳されていたところが、2017では「赦します」と現在形に変更られています。

どちらの訳を取るにしても押さえておくべきことは、私たちが誰かを赦すことが神の赦しを受ける条件ではないということです。すでに私たちはこの主の祈りで「父よ」と呼びかけています。生まれながら神の御怒りを受けるべき子らであった罪人の私たちが、聖なる神に向かって「父よ」と呼びかけることができるのは、私たちがイエス・キリストを信じて、この方であって罪を赦されたからです。「赦し」というものは私たちの行いに基づいて与えられるのではない。神の恵みによって赦され、神の子どもとされている者たちとして、私たちはこの5番目の祈りも祈るのです。

するとある人は問うかもしれません。なぜ罪を赦されている人がまたここで罪の赦しを祈り求めるのかと。その答えは、一度神の赦しを受けたらあとはもう罪の赦しを求める必要がない人間に私たちはなるわけではないということです。私たちはイエス・キリストを信じて根本的な赦しを神から頂きました。決定的な聖めの恵みをいただきました。しかし地上においてなお日々罪を犯します。それはそのままにしておいて良いではありません。日々この祈りを祈ることを通して、その罪の赦しを受けるようにと招かれているのです。

その罪がここで「負い目」と表現されています。これは罪について重要なニュアンスを私たちに教えてくれます。それは罪とは負い目であるということです。誰に対する負い目かと言うと神に対する負い目です。分かりやすく言えば神への借金です。もちろんそれはお金の問題ではありません。私たちは神に造られた者たちとして、何よりもまず神に対して責任を持っている者たちです。世の人々はそのようには考えていません。誰かに迷惑をかけなければ、個人で楽しむ分には何をしても良い。そのように罪が社会的影響という観点からのみ考えられています。しかし聖書が示しているのは、それ以前に人間は一人一人神に対して道徳的責任があるということです。神は人間が歩むべき道徳的基準を定めています。一言で言えばそれはご自身を映し出すような歩みです。神のかたちに造られた人間は本来神を映し出すように歩むべき者たちです。その具体的な内容が律法に示されており、また聖書のあらゆるページに明らかに示されています。その神の御心から外れて歩むこと、それに違反して歩むことは、神の前に果たすべき義務を

果たしていないことになる。それが「負い目」です。返さなければならない負債を負っている状態です。そして借金や負債について重要なことは、それは必ず清算されなければならないということです。人々は神を無視し、この神に対する負債ということに無頓着に生活していますが、積み積もったその借金がいずれ必ず清算される時が来るのです！聖書は最後のさばきの日に、一人一人神の前に出て申し開きをすると述べています。もし私たちが何の対策も講じないでその日を迎えたら、一体その日はどんなことになってしまうでしょう。果たして私たちの神に対する違反のつけ、負債はどれほどのものでしょうか。それはどれほど恐ろしく積み上がっているのでしょうか。果たしてその日が来ても私たちは大丈夫なののでしょうか。

しかしそのような私たちへのグッド・ニュースがここにあります。それは何と神は私たちの負い目を赦してくださるということです。私たちが神の前に未精算で保ち続ける借金の総計は、もはや自分でどうこうできるレベルのものではない。ところがそのとてつもない負債を、神はこの祈りを通して赦してくださる。どのようにしてでしょうか。それは御子イエス様の十字架の犠牲を通してです。神は私たちをこの罪の負債の地獄から救うために、ご自身の大切な一人子を世に遣わし、十字架の死にまで送ってくださいました。これによって私たちを贖い出すために必要な借金を全額払ってくださいました。私たちはその神の恵みの御業に感謝し、自らの罪を告白し、この祈りを祈ることを通して、その負債を赦されるのです。それはどんなに素晴らしいことでしょうか！それは返済不可能な借金を抱えていた人が、すべて免除され、借金なしの状態になったようなことです。もはや神の前にそのことで責められることはない。神との関係を妨げていた罪が取り除かれて、その人は神に近づいて神とともに生きることができる。先の第4の祈りでは、日ごとの糧のための祈りを捧げましたが、肉体を支えるパンがあれば私たちには十分なではありません。真のいのちは、神との親しい交わりに歩むところにこそ与えられます。従ってこの罪が赦されるところにこそ、私たちにとっての真のいのち、神に造られた人間にとっての最も幸いな生活があるのです。

しかしこの祈りにおいても一つ教えられることは、この神の赦しに生きる人は他の人を赦す人でもなければならぬということです。それが12節後半の「私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦します」という部分です。言い換えれば神との縦の関係において受けた赦しは、人との横の関係においても現わされなければならないということです。この神の赦しと私たちの赦しについて良い注解をしているのが、後の18

章 21～35 節に記されている一万タラントを赦されたしもべのたとえでしょう。その箇所がまず教えていることは、私たちが神に負っている負債は、誰かが私に負っている負債よりもはるかに大きいということです。24 節の「一万タラント」というところには印が付いていて、欄外の 24 を見ると、「一タラントは 6000 デナリに相当する」とあります。1 デナリは当時の一日分の労賃に相当しましたから、1 タラントは 6000 日分の労賃、従って一万タラントは 6 千万日分の給料に相当します。年数に換算すると、一年間毎日働いたとして 365 で割ると 16 万 4 千年分の給料になります。仮に人生 100 年とし、生まれた時から死ぬ時まで毎日働くとするれば、人生何回分になるかと計算してみるとどうでしょう。何とそれは人生を 1643 回も繰り返さなくては返せない金額となります。もう無理です。考えただけで絶望です。これが私たちが神に対して持っている関係です。ところが神は何と、このような負債を負う私たちをかわいそうに思って、その借金全部を赦してくださったということが、このたとえの中で語られます。もしこのような恵みを私たちが受けたらどうでしょう。それは何と言葉にならない素晴らしい救いでしょうか。私たちはまさに地獄から救い出されて、踊り上がって喜び、ジャンプしたりスキップしたりして町の中を歩くでしょう！そういう人がたとえの続きにおいて 100 デナリ貸しのある人に出会います。こちらは 100 日分の労賃に相当します。3～4 カ月分の給料です。もちろんそれなりに大きな額ではありますが、それでも自分が受けた赦しに比べればずっとずっと小さい。その人はどうすべきでしょうか。その人は当然、その人を赦してあげるべきです。いいよ、いいよ、それくらいと。自分がしてもらったことの大きさを考えるなら、それよりはるかに小さなあわれみは当然他の人にもかけてあげるべきです。ところがたとえの中のしもべは 100 デナリ貸しのある人を赦しませんでした。首を絞め、今すぐ返せ！と迫り、それができない相手を牢屋にぶち込みました。これによって彼が示したことは、自分が主人から受けたあわれみを本当には感謝していなかったということです。主人がどれだけ犠牲を払って自分を赦してくれたか、そのことに少しも心動かされていないし、何でもないことのように思っている。そこで主人は彼を呼びつけて言います。32～33 節：「そこで主君は彼を呼びつけて言った。『悪い家来だ。おまえが私に懇願したから、私はおまえの負債をすべて免除してやったのだ。私がおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか。』」 こうして主君は怒って、借金を全部返すまで彼を獄吏たちに引き渡しました。そしてイエス様は最後、こうまとめています。35 節：「あなたがたもそれぞれ自分の兄弟を心から赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに、このようになさるのです。」これはまさに今日の祈りの良い注解でしょう。この話から分かりますように神の赦しが

先です。しかしその神の赦しの恵みにあずかった人は他の人に対して同じようにする者でなければならない。この二つのことは切り離せない関係にあるものです。別々には考えられないことです。ですから一方があるかどうかによって、もう片方もあるかどうか分かるという性質の事柄です。そこで今日の箇所に戻って6章14～15節でこう述べて強調されています。「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しになりません。」 自分は他の人を赦さないのに、自分だけ神に赦してもらおうということはできません。神の赦しを受け取った人は必ず他の人をも赦すように導かれます。しかもその人は喜んでそうするはずです。神がしてくださったことに心動かされて、神が私を赦してくださったように私も他の人を赦そう！と導かれる。そのことによってその人は確かに自分は神の赦しの世界に生かされているのだな～ということを確認するのです。そして神にいよいよ感謝して近づき、神とともに歩む祝福へと進んで行くのです。

私たちはこの第5番目の祈りを心からアーメンと神を賛美しながら祈れるでしょうか。それともまだ赦していない人たちのことが頭に浮かんで来て、心の中にくすぶりが生じるような者でしょうか。私たちはこの祈りによって自分の信仰を確かめさせられます。自分は本当に神の赦しを受け取っているのか。自分はどれくらい神に赦された者であることが分かっているのか。そしてその神のしてくださったことに感謝して生きようとしているのか。神が招いてくださっている恵みの世界とは、この私の途方もない罪の負債が全部赦されると同時に、私も他者の負債を喜んで赦すという世界です。この二つのことはセットです。他の人を赦すことに現れ出なければ、いくら私は神から赦しをいただいたと言ってもそれはどこかがおかしい。私たちの霊の目が開かれて、自分は神の前にどんなに大きな負債を負っていた者であるか、そしてそんな自分を神はどんなに大きなあわれみを持って赦してくださったかを知り、この恵みを自分のものとして日々受け取り続ける者でありますように。このことが分かれば私たちは他の人を喜んで赦すように導かれるはずです。そのことが神の赦しに伴って来ます。そのように私たちを生かしてくださる神の恵みを「主の祈り」を祈るたびごとに新たに味わい、御名を賛美して益々神に大胆に近づき、まことのいのちに生かされる神の子どもたちの歩みへ進みたいと思います。